

表紙のタンチョウヅル『寄り添い 季節を超えて』。春の光の中で互いに翼を大きく広げ、呼応する一瞬を捉えた写真です。コロナ禍を越え、日常を取り戻しつつあった2023年に釧路で撮影されたとのこと。「協力しあってみんなで前を向いて進む」「季節を超えて希望は確かに息づく」まさに今号の空気を一枚で語っているように感じました。

今号を読み進めると、私たち医療者が“翼を広げる”場面がたくさん出てきます。国民保護訓練における先島住民避難の検討や、那覇空港での航空機事故対処訓練など、「起きないでほしいこと」をあえて具体的に想定し、手順をすり合わせる記事が並びます。訓練というのは不思議なもので、やればやるほど「ここ、まだ決まっていなかったのか…」が見つかります。ですが、見つけた時点で前進です。現場で実際に動けなければ対応が難しい、だからこそ一人ひとりが責任を自覚し、医療コーディネーターとも意識共有・研修が重要という議論は、耳が痛いほど本質的でした。

さらに「沖縄県のHIV/AIDS対策」では、沖縄が重点対策地域であり、“いきなりエイズ症例”が人口10万人あたり全国ワースト2位という現実が示され、予防と早期診断が喫緊の課題であることが強調されています。ここは、

医療者の“寄り添い力”が最も問われる領域の一つです。相談のハードルを下げ、検査につなげ、診断後も切れ目なく支える地味で、根気が必要です。その積み重ねが「季節を超える希望」そのものだと思います。

また、生涯教育コーナーのHPVワクチンの論考では、積極的勧奨の中止が接種行動に与えた影響や、再開後の課題、自治体の準備が難渋している状況が丁寧に整理されています。「正しい情報が届くこと」の難しさと大切さを、改めて突きつけられました。

人材確保の話題も現実味があります。介護人材不足の深刻化を踏まえ、外国人介護人材を含む参入促進や定着支援、ICT・介護ロボット活用を後押しする「かいテク沖縄」設置など、働きやすい環境づくりが進められていることが紹介されています。医療も介護も、最終的には“人”で成り立つ仕事です。だからこそ、人が燃え尽きない仕組みを作る——これもまた、寄り添いの形だと思います。

タンチョウの翼は大きい。私たちの翼は、制度・連携・訓練・教育・広報・そして日々の診療です。左右バラバラに動かすと飛べません。互いに呼応しながら、同じ方向へ。今号が、その「呼吸を合わせる」きっかけになれば幸いです。

広報委員 間仁田 守

